OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	100回記念例会
Author(s)	伊東, 一信
Citation	デザイン理論. 1984, 23, p. 2-3
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52707
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

栄光の100回例会

伊　東　一　信

去る昭和59年７月14日，兵庫教育大学に於て第100回記念研究例会が開催された。

昭和34年11月に学会が創立され，同年12月，第１回研究例会が開催されてより，実に25年になんなんとする歳月を経過して，今回ついに100回目を迎えることができた。この喜びは何にたとえようもない。

振り返って今までの研究例会や見学会等のことを思い出してみると，非常に多彩な内容のものであって，その一コマ一コマが走馬燈のように脳裡を横切って行く。この25年間例会の開催を見合せたというようなことは一度もなかった。100回の例会を開催するということは，まことに並大抵のことではない。事務局の方々，役員並びに会員諸氏の創立以来のご努力とご尽力が今ここに実を結んだものである。

今回の例会の会場が環境に恵まれた新設大学であったことは，栄光の100回例会に実にふさわしいことであった。最初は会場が京都や大阪から距離的に離れているので，参加者が少ないのではないかと危惧されていたが，当日は予想以上に多数の会員の方々のご参会を得て，非常に充実した例会になったことはまことに喜ばしいことであった。

「コンピューターと造形教育」と題された兵庫教育大学の杉山直樹氏の研究発表は，音楽演奏室という普通教室とは趣きの異なる雰囲気の中で行われた。氏の研究発表はコンピューターを造形教育の実践の場にどのように生かすかとい

う点について示唆に富んだものであった。研究発表の後、芸術棟の中のデザイン関係設備の紹介と施設の案内が行われたが、充実した設備と施設を見学して大いに参考になるものがあった。又、翌日は丹波焼窯元および丹波古陶館を見学して丹波焼についての認識を深めることができた。緑の樹々に囲まれた会場で行われた今回の研究例会は本当に心洗われる気分がして，しかも実に有意義なものであった。

今回100回例会を迎えたところで，意匠学会は一つの時代を画し，これから又，気分も新たに大きく前進して行かなければならないだろう。最近日本のデザイン界は急激な発展を遂げた。かつて私がオランダを訪れた際，アムステルダムのデザイナー，サンピーク氏の講演を聞く機会を得たが，その話の中に「日本から来られたデザイナーの方々は，ヨーロッパに来れば仕事に役立つものが見られたり，話が聞けたりすると思っていらっしゃるようですが，いまやヨーロッパにデザインのお手本はありません。ヨーロッパのデザイナーと日本のデザイナーは優劣がつけられないからです。そしてこれから私自身のデザインもどの方向に進むべきか分っていないのです。」というくだりがあった。この話のように日本のデザインの水準は非常に高くなって来ている。まさに水を満々とたたえた湖のように我々の前に横たわっている。しかしその湖が流出口を求めるように，今，日本のデザイン界は新らしい次の時代の本流を求めてさまよっているようにみえる。

日本に於けるデザインの将来についての理論的方向性を示すところにも，意匠学会の使命があるのではなかろうか。100回例会を終ったところで強く感じるのは，意匠学会が益々発展して，日本のデザイン界並びに学界のために貢献しなければならないということである。